大阪TOWNタウン

400年ぶり里帰り

堺の職人創作仙台すずめ踊り

定期的に練習、アレンジ

——昨年、集団祭連「堺『鳴組』」を結成——

・堺市

近世初期に堺の職人たちによって生み出された仙台市の伝統芸能「仙台すずめ踊り」。踊りはプロ野球「東北楽天ゴールデンイーグルス」の応援パフォーマンスにも採用されている。堺市では長らくその認知度は低く、すずめ踊りを踊る集団"祭連"(まづら)は存在しなかったが、昨年同市の堺地区で発足。四百年の時を越えた里帰りに行政や市民団体の視線も熱く、これから市民の郷土愛に火を付けそうだ。

すずめ踊りは一六〇三(慶長八)年、仙台・青葉城の築城移転の宴席で、堺出身の石工(いしく)たちが即興で披露した踊りが発祥。踊る姿がすずめに似ていたのと伊達家の家紋が「竹にすずめ」だったため同呼称がついたと言われている。現在仙台では約四十の祭連が存在。さまざまな祭りや行事で披露され発展を続けている。

踊りの特徴は二枚の扇子を使うこと。服装は和風なら何でもよく、振り付けも自由。しの笛と大小の太鼓、かねを使った二拍子のお囃子(はやし)にのってリズミカルに踊る。

里帰りのきっかけをつくったのは泉佐野市在住の藤田純子さん(五〇)。二〇〇三年に「泉州ソーリャ踊り子隊」の代表で仙台市のよさこい祭りに参加したとき、偶然すずめ踊りの存在を知った。「なんとかこの踊りを泉州に里帰りさせたい」と翌年に仙台に出向き基本を習得。踊りの弟子に当たる「堺よさこい『鳴組』」の代表・楠本篤子さん(五〇)と協力して同年十月の「堺祭り」のパレード参加にこぎ着けた。

バトンを受け継いだ楠本さんは、同団体の中から有志を募り、すずめ踊りのための祭連「堺『鳴組』」を結成。最初は、扇子の用意などすべてが手探りで練習もままならなかったが、現在は月一回小学校の体育館などで定期的に練習を行い、踊りにアレンジを加えながら各地のイベントに参加している。

楠本さんが住む市小学校区は中世の環濠都市堺が興隆を迎えた地域でもあり「堺の石工が作ったというすずめ踊りをここでやるのは歴史的な意義を感じる」と述べ、藤田さんは「堺で祭連が増えて伝統芸能として根付き、仙台との交流の懸け橋にもなれば嬉しい」と思いを語っていた。

(豊野宙慶記者)

400年ぶりの里帰りを実現させた「堺『鳴組』」のメンバー